口頭発表E③　14:50～15:10

保育者養成校の短大生に専門性を意識づける「保育者論」の授業のあり方
～アクティブ・ラーニングを取り入れて～

戸井　和彦
聖カタリナ大学短期大学部保育学科

1　必須科目「保育者論」の授業構成

幼児教育の無償化実施などの影響もあり、保育現場に対する注目度が上がっている。それに比べてそこで勤務する保育者の仕事に対する世間の関心度は低い。

「子どもと遊んでいるだけで楽だな」「あのようなことは私でもできる」こういった心ない思いを抱いている人も多い。その原因はいろいろあるが、いちばん大きなものとして保育者の専門性が外部の人から分かりにくい」点が挙げられる。

本短大は2年間で保育者（保育士　幼稚園教諭）を取るようになっている。2 年間で取得する単位数も多く、かなりハードである。高校を卒業し、入学したばかりの学生にとって保育者の専門性についてあまり深く考えることもなく、ただ、単位修得に明け暮れている。

こういった状況で保育現場に出たときに専門性を自覚し、やりがいをもって仕事に取り組んでいけるのか疑問に思える。保育の専門性について講義形式で受動的に学ぶだけでなく、自分から進んで学習することで身に付けるようにしていかねばならない。時間的にはかなり制限があるが、アクティブ・ラーニングの活動を取り入れていかねばならない。

本学では入学した1年生の前期に「保育者論」の授業が位置づけられている。保育者とは何かについて学ぶ科目である。高校を卒業して入学したばかりの学生のこの科目の学習を通して、保育者の専門性について主体的に学び、実習、就職と続く活動につなげていけるように願い、授業の中にアクティブ・ラーニングの活動を導入し、**保育者の専門性について自主的に考えられるように**した。

全15時間の指導計画は次の通りである。

1）社会における幼児教育の変遷と役割
2）保育者として求められる資質と人間性
3）保育者の倫理と職責
4）保育者の専門性とは何か　幼児理解
5）保育者の専門性　専門的な知識・技能・態度
6）保育者の専門性　保育の構想と実践化
7）保育の専門性　幼児の理解
8）保育の専門性　配慮を要する子の実態と対応
9）保育者の専門性　保育者の現状と専門的な判断
10）園全体の協働によるチーム園運営の対応
11）小学校との連携のあり方
12）保護者に対する子育ての指導　支援のあり方
13）地域や専門機関との連携
14）保育者の成長　キャリア形成
15）園内外研修による専門性の向上

「保育者の専門性」は全体を通して貫かれているテーマの1つである。

2　アクティブ・ラーニングを取り入れた授業

入学直後の授業、後期から始まる保育の実習へとつながる授業という位置づけを踏まえ、講義型の授業だけでなく、次のような方法を取り入れた。

①グループでの話し合い　ミニボード記入　発表
②教室内でのミニ体験活動（ゲーム　制作など）
③資料（写真・音声資料）などをもとに討議する。
④先人の体験談から学ぶ（倉橋惣三など）
⑤事例から学ぶ
⑥役割演技　グループの模擬保育
⑦調べたことのワークシート記入、発表

授業の最後に全学生に自由記述式のアンケートを取り、それをテキストマイニングの手法を用いて分析した。対象は2019年度新入学生の79名である。

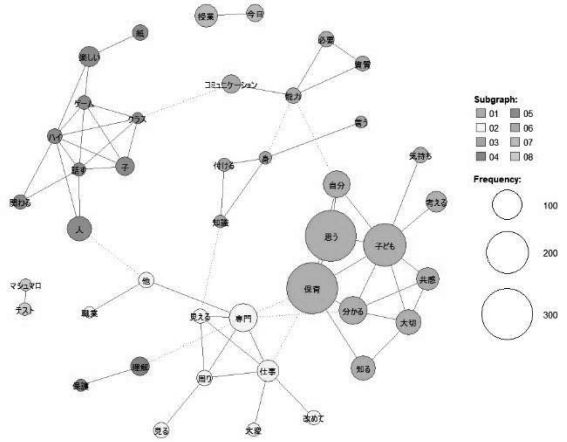
今回は全14回の授業後の自由記述のうち、4回分（1回目、4回目、7回目10回目）の授業参加者全員の自由記述を取り上げた。

まず、分析者の先入観、予断、思い込みを極力受けない形で**データの全体像を把握**した。自由記述の感想の中に含まれている「語」の集計情報を計量的に分析し、「語」同士がどのような似通った文脈で使われているのかを**共起ネットワーク（図1）**で表した。使用したソフトはKH　Coder である。

すると、だいたい5種類の話題で構成されていることが見えてきた。抽出語の共起関係を見てみると次のようになった。それぞれのまとまりにタイトル

を次のようにつけた。　また、KWIC の機能を使って、どういった文脈で使用されているのかを見た。例えば、「専門」の場合、専門性、専門的、専門職、専門家　専門などの形で使用されていることが分かった。

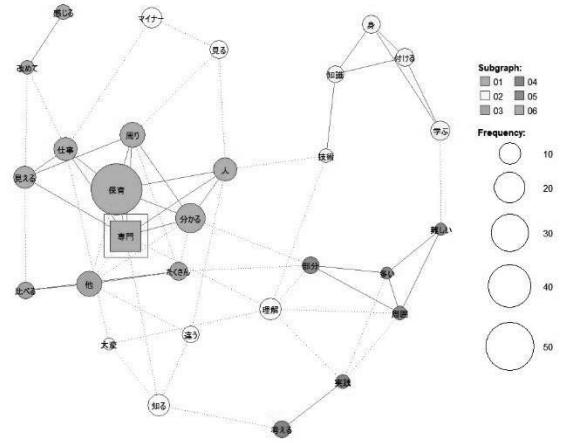
（図 1）共起ネットワーク



①コミュニケーション能力の話題
②子どもとの付き合い方
③知識を身に付ける
④クラスの学生との交流
⑤保育者の仕事の専門性

次にそれぞれのテーマで**関連語の分析**を行った。「専門」と出現パターンが似ている語をネットワークで表示してみた。

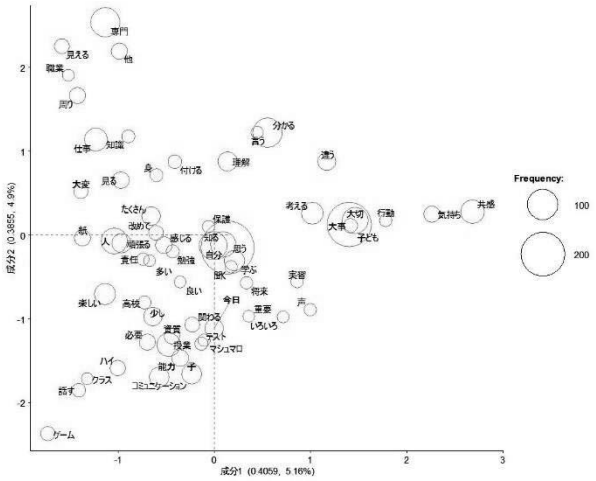
（図 2）関連語検索「専門」の結果



四角で表示されているのが中心となる用語である。毎時の授業内容によって出てくる「語」の多少は代わってくるが、「専門」性は見えにくいので、見えるようにする。そのために知識や技能を身に付けることを改めて感じていることが分かる。そのため、主体的に取り組んでいく必要がある。

対応分析で表示してみると、次のようになった。原点付近に布置された「語」は、特定の属性に対応しないコードと判断される。「専門」の他に、遠く離れた「共感」「コミュニケーション」「話す」などが必要とされることを学んでいることが分かる。「共感」は先人の体験を自分の今までの子どもの関わり方と比べて学習したところである。

（図 3）対応分析



学生が授業の中で心に残っている学びの部分がここである。講義型授業の中に多様なアクティブ・ラーニングの手法を取り入れることで、「保育者論」の学びがより主体的に学習なものになっていくのではないかと考えられる。

3　結果と考察

分析した自由記述の文章をから見えてきたことである。また、ほぼすべて講義型で進める授業をしていないので、比較できなかった。

最後の 1 人の学生の感想を紹介する。

子どもとの関わり、専門性、発達障がいについてなど保育者に必要な知識を前期の約 4 ヶ月でたくさん学び、保育者になるための一歩を踏み出したという実感をもった授業でした。私が特に印象に残っているのは保育者の専門性についてです。子どもと遊んでいるだけというように見られたりするなどして、あまり周りから理解されないということを知り、少し悔しかったです。それで自分が考えて知識や技術を行動に移して子どもと一緒に成長していけたらいいなと思いました。将来のためにこれからもしっかりと学んでいきたいです。

実習でうまくいかずにやる気を失ってしまう学生が少なからずいる。実習に入る前に、あるいは就職に至るまでにアクティブ・ラーニングを取り入れた意図的に実施することで、保育者としての自覚を高め、専門性について自分なりの考えを形成することができると考えられる。